
パンデミック

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンデミック

【Nコード】

N9332Y

【作者名】

柊

【あらすじ】

ある休日それが起きる。俺が起きると信じられない、いや、信じたくない光景が目飛び込んでくる。

誤字脱字があれば言うていただけると嬉しいです。感想など書いていただけると舞うほどうれしいです。

以下二つの話は同じ世界の話ですが、主人公が違います。見てみてください。

<http://ncode.syosetu.com/n108>

2 5
z z
/ /
 h
 t
 t
 p
 :
 /
 /
 n
 c
 o
 d
 e
 .
 s
 y
 o
 s
 e
 t
 u
 .
 c
 o
 m
 /
 n
 1
 0
 9

終わりの始まり

ちっ、外が騒がしいな。休日位ゆっくりと寝させてほしいものだが、朝食を取った後眠くもう一度寝ていたが、時間帯午前11時くらいだろうか。

外の騒がしさのせいで目が覚めた。

何だろうか、騒がしいと言うか悲鳴のようなものが聞こえる。はっきり言って煩いし、迷惑だ。

・・・何かおかしい。悲鳴が聞こえた、それじゃない。もっと、根本的に何かが・・・そうだ、悲鳴が大勢多数のものだった気がする。

何処からだ？

その疑問の答えを見つけるべく俺は窓から外を見た。

「ははっ、なんだこれ。」

俺の目に映ったその光景は信じがたいもので。

そして、同時に自分の目を疑いたくなるようなものだった。

「人が人を襲っている・・・？」

逃げ惑う人、そしてそれを追う者二種類の人間に分かれていた。

「おいおいおい、どうなってんだよこれはよお。」

夢の続きか？そうだとしても悪夢の類だろうか。

いやいやどうする、どうしたらいいんだ？

考えていると家のドアが開く音がした。

あれが入って来たか！？

しかし、予想とは裏腹に入って来た者は違った。

「おい、大丈夫か？いや腕を怪我しているのか。」

入ってきたのは、20代くらいの男性で腕を怪我していた。何か引き裂かれたような感じだった。

「おい、何があつたんだ。説明してくれ！」

だが、入ってきたのは男性だけに止まらなくそれは叶わなかった。

「ちっ、追われていたのかよ。」

男性は逃げてきたらしく、奴らが入ってきた。

ここは逃げるしかないか・・・ない！！

俺は靴を手に取りすぐに自室まで戻り、ベッドの下からバックを取り出した。

震災などに備えて用意していたバッグがこんなところで役に立つとはな。

「これも持っていくか。」

そう言い取り出したのは刃渡り15cm程のナイフだった。それをベルトで腰に付け窓から外に出た。

「まったく。夢じゃないんだよね？」

相変わらず、おかしい状況が続いていた。

道には奴らしかいないんじゃないのか、と錯覚してしまうほどだった。

いや、実際に人と言えるような者は皆逃げたのだろう。

「ここに居たらまずいか。」

だが、だからと言って何処に行こうか？

「うわあああああ」

そう考えていると男性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の聴こえた方へ目を向けると予想通り男性が襲われていた。男性は捕まれている抵抗できないでいたようだ。

ちっ、やるしかないか!!

「おらあああああ!!」

ナイフをホルダーから抜き、後ろから心臓を刺す。

人を殺すなんて初めてなんだがな・・・いやもう人とは呼べないか。

「おい、大丈夫・・・!!」

たしかに心臓を刺したはずだ。いや、人体の構造について詳しい知識があるわけではないが
心臓の大体の位置位は知ってるつもりだ。
なら・・・なんで

「なんで動いてるんだよ!!??」

おかしいおかしいおかしい

そいつは首を後ろに180度回転してこちらを見ている。
その瞬間頭の中で警報が鳴り響く。

くそっ、心臓で駄目なら・・・頭はどうだ!

そして奴の目からの脳までに向かってナイフを突き刺す。

これでもダメか・・・?

そう思っていたが奴は力を無くした。

「はぁ、はぁ、はぁ。おい、あんた大丈夫か？」

見たところ腕を怪我していた。見た感じ食い干切られた
ような傷だった。

「とりあえず歩けるか?ここに居たらまだ危険だろうから。
って、聞こえてるか?」

何処か様子がおかしい。問いかけても全く反応しない。
そろそろ痺れを切らし、措いて行こうかとも考えていた時・・・

「ん？」

反応がなかった男性が目を見開き、こちらを向いた。そして、そのまま俺の腕を掴んできた。

なんつう腕力だよ。かなり握りしめられている。

男性は俺に顔を近づけようとして・・・

「!!!」

俺は一瞬で判断を下し男性の目をナイフで刺した。正確に言うならば、男性の頭を目がけて・・・だ。

「クソツたれが!!!」

間違いない。こいつもあいつらと同じように俺を噛もうとしてきやがった。

男性が力尽きたのを確認し、ナイフを抜いた。

「とりあえず何処かで考えをまとめよう。」

そう言い何処か気休めの安全な場所を探すことにした。

終わりの始まり（後書き）

こんな感じの小説です。

暖かい目で見てもらえると嬉しいです。

色々確認(前書き)

やっと2話です。

京谷さん……投稿早すぎです。

色々確認

とりあえず奴らを躲かわしながら近くの公園に来ていた。公園にある遊具の中に隠れてとりあえずやり過ごすことにした。

よし、まずはこれまでの状況をまとめてみよう。

まず朝の11時くらいに悲鳴が聞こえて俺は起きた、そして人が人を襲っているという場面を目撃し、その後家から俺は脱出して通りに出た。

そこまでは良かったが男性が襲われているのを見て、後ろから奴の心臓をナイフで刺した・・・が死ななかった。

次に頭を刺したら死んだようだったが。

男性は傷を負わされたようで、腕をかまれたような感じだった。

しばらく反応が無かったがそれから少ししてこちらを向き、俺の腕を掴んできた。そしてそのまま俺のことを噛かもうとしてきたから

それを俺が阻止そしするために男性を殺した。

で、今に至いたる。と言う感じか・・・

今までに起こってきたことは大体まとまったな。

ちなみに今は午後1時くらいだ。

次にこれまで起こって来たことから

奴らについてわかることは、奴らは頭部へダメージを与えなければ死なないようだ。それと腕力がとても強いこと。

そして、おそらくやつらは何かの感染症の類かかに罹かかっているのだろう。噛み傷からそれが感染するのだろう。

先ほどの男性がその例だ。

とりあえず今わかることはこのくらいか。

次は何をするべきかな・・・

そう考えているとあることに思い出した。

「そつだ、このバックの中確認しないと。」

俺は背負っていたバックを降ろし中中を確認することにした。バックを逆さにし、バックの中身をぶちまけた。

中からはいろいろなものが出てきた。

「まずラジオか。一気に出したのはまずかったか・・・？」

壊れてないか心配になってきた。

「次に、・・・懐中電灯。」

なんで中身ぶちまけたんだろう。

「後は絆創膏はよなどの医療具と・・・」

残りの目の前にあるものを一つ一つ手に取りながら確認していく。

「500mlペットボトルの水3本、金平糖、缶詰6つ、乾パン4つ、

保存パン4つ、と言ったところか。」

食糧多いな、通りでバックが4、5？位するわけだ。

でも、一週間くらいはもちそつだな。

それともう一つ入っていたであろう物があった。

「ナイフ……か。今使ってるものとは違う……よな。
刃渡り15、いや16cmくらいか。」

そうだ、これの後に買ったナイフが今使っている奴で
そっち気に入ったからこれを非常用にしたんだ。
……今はバッグに入れておくか。

俺はバッグの中身を全部バッグの中に戻した。

「これで確認は終わったな。」

とりあえず落ち着いたし、連絡を取ってみるか。

俺はバッグを背負いポケットから携帯電話を取り出し
遊具から出た。

そしてある人物と連絡を取る。

その人物とは火神 かがみ 冬威 とついでい……俺の親友だ。

1 コール……出ない。 2 コール……出ない。 3 コール……出
た。

繋がった。

「冬威か!？」

「ああ、お前か。」

冬威と言う事は確認した。

「冬威今どこにいる。」

「今は家……に向かっている。詳しく言えばコンビニから出てすぐだ。」

「とりあえずどこかで合流しよう」

「いいけど、やっぱりお前も見たのか。アレ。」

「ああ、そうだ。アイツらに噛まれるなよ？噛み傷から感染病の類が感染すると思う、感染したら奴らの仲間入りだ
できるだけ奴らを避ける。」

「情報ありがとう。じゃあ俺からもやる。奴らは目が悪い、いや目は見えないんだと思う。」

その代り聴力が良くて、それで人を追いかけてるんだと思う。」

「そうなのか？」

「ああ、携帯電話のコールの音のせいかな奴らが集まってきたからな。」

「それは悪いことしたな。しかし、やっと分かったよ。どうりで奴らが

こっちに向かってくるはずだ。まあ、お互い死なないようにな。」

「それで、どこで合流する？」

時折電話から何かを殴ったりする音が聞こえてくる。

俺も逃げるか。

「お前の家は安全なのか？」

「ああ、今のところはな。」

「じゃあ、俺がお前の家に行く。時間は4時くらいになると思っ。」

「わかった。そろそろ切るぞ。気をつけろよ。」

「ああ、冬威もな。」

冬威はそれを聞いて電話を切ったようだ。

「さて俺もさっさと逃げるか。」

これで目標が決まった。そしてその約束を守るべく俺は行動に移った。

色々と確認（後書き）

そろそろ二人目のキャラクターが出ます。

名前だけ出ましたが冬威です。

拳銃（前書き）

相変わらず遅い投稿だなと思う。

拳銃

冬威と連絡を取りあった後、すぐに移動することにした。

冬威との会話中に奴らが集まってきたが、そいつ等との戦闘はできるだけ避けるようにした。

避けれない奴だけ殺すようにした。

戦わないようにしているのは、戦うと奴らに囲まれる可能性が高いからだ。

まして今の装備はナイフだ、これでは一体やるのにですら時間がかかる。

確実に囲まれると言ってもいい。銃とかなら楽なんだがな……。

走っているうちに奴らは撒けたようだ。

「よし、何とかなったか。」

流石にずっと走ってたから疲れたな。

そう思い何処か休めるところを探していた時……

「ちっ、また奴らか。」

また、奴が歩いていた。また奴らかよ、と悪態をついたが俺はあることに気付いた。気付いた事とはそいつの服装だ。

もしかして……

俺はそいつを避けずに殺した・・・
殺すときにはできるだけ音をたてないように気を付け
倒れる時も音を立てないようにおろした。
暗殺者みたいだな、日本だと忍者か？
そんな事を考えながら俺はそいつの装備を漁っていた。
こんなことを考えられるなんて段々この状況に慣れて来ているのか
もしれないな。

そして、目当てのものが見つかった。

「本物なんて初めて持ったな。ま、それが当然か。」

俺の手にあるのは黒光りした物、拳銃だ。

俺が殺したのは恐らく警察官だった者だ。

まあ、拳銃もってるし警官だったろうけど。

これは拝借していいこうか。

これで少しは奴らへの抵抗が楽になったかな。

だが奴らは耳が良いらしいし、それに弾薬も限られてるから
使いどころを考えないとな。

長居するのもよくない、冬威の家に向かうか。

拳銃（後書き）

まあ、特にいらぬシーンにも見えるかもしれないけど拳銃を手に入れるシーンを入れたかったんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332y/>

パンデミック

2011年12月10日23時55分発行